

教宣 せぶん

シーン 傍聴席の様子

12月22日、財産訴訟の第2回証人調べが行なわれました。この日は脱退を決議した当時の責任者である脇山前支部執行委員長が証言に立ちました。彼がどんな証言をするのか大変注目されたわけですが、その約90分の尋問の様子をいくつかのシーンに分けてお伝えします。

この日、裁判が行なわれる619号法廷の傍聴席に開始40分前に足を踏み入れると、すでに労組側メンバーの方々が数名座っていました。地位確認訴訟や都労委審問、この財産訴訟においても、被告側のこんな光景は始めて見ました。この日の619号法廷は私たちの裁判の前に別の事件があったわけですが、彼らはその裁判から傍聴していました。おそらくこの日の証人調べが私たち原告にとって非常に関心度が高いため、傍聴席が独占されてしまうという心配から、「前の事件からの傍聴」になったのだと思います。結局労組側のメンバーは傍聴席に5名座って、この日の脇山証言を見ました。

普通に考えれば、彼らの役割は、圧倒的な「アウェイ」環境がつくられる中で、少しでも脇山証人を「応援する」「見守っている」という状況をつくることだったと考えられるわけですが、東海経営や東海労組、全損保を敵視する資本とのたたかいを繰り広げてきた百戦錬磨の方々の見方は違っていました。その方々は「あれは見守っているのではなく監視しているのだ」と口を揃えて断言していました。証言の内容はともかく、脇山証人は、昔の仲間からの鋭い視線と、いまの仲間からの監視の視線を背中に浴びて、相当なプレッシャーの中での証言だったはずだと分析していました。そう言えば、主尋問の冒頭に自らの活動歴や全損保の歴史について述べる場面がありました。この日のために、何回も「練習」してきているはずですが、信じられないほど誤っていました。労組側弁護士は、その度に証人自らが書いた陳述書を見せ、訂正を促すわけですが、証人の頭の中は相当混乱していたようです。また、反対尋問では、私たちの代理人の先生の質問に声を荒げたり、ふてくされるような態度をとったり、投げやりな態度も見せていました。「ああいう態度は裁判官の心証は良くないんだよね」という専門家の指摘もありました。やはりこの尋問が証人にとって相当なストレスになっていたと思います。

脇山証言で、当時の真相や事実を知る私たちの傍聴席が「おいおい」とざわつく場面が何回かありました。一番ざわつきが大きかったのは、「全損保に留まれば、会社から特社採用はなくなると言われたのではないですか」の問いに「状況を考えて想定ができたということ」と答え、「どうして想定できたのですか」の問いに「それを話

せば1時間や2時間ではすまない」と証人が答えた場面でした。「その想定をぜひ聞きたい」「1時間や2時間かかってもかまわない」という声が沸きあがりました。そういったざわつきに対して労組側傍聴人は鋭い視線を投げかけます。そこには労組側傍聴人の使命感と純粹さを感じないでもないのですが、同時に虐げられたことのない者、事実を捻じ曲げられたことのない者の「奥行きのかなさ」を感じてしまいました。

傍聴席は20名しか入れない、小さな法廷でした。この日のためにわざわざ福岡から傍聴しに来てくれた組合OBの方をはじめ、多くの関係者が集まってくれました。案の定、傍聴席に入りきれず、人数調整せざるを得ない状況が生まれました。おそらく、この日のために、自費で福岡からわざわざ上京する方の気持ちは、順風満帆に育ってきた労組側傍聴人にはわからないはずです。